



「運・鈍・根」プラス「感」

元村有希子



いまこのページを開いたあなたはどんな心境だろうか。実験がうまくいって、充実した気持ちでカップ麺をすすりながら、偶然この雑誌に目がとまったかもしれない。研究について先輩から注意されてへこんでいるかもしれない。就職活動のヒントを求めてこのページを開いてくれたかもしれない。

ここでは、博士の将来をめぐる現状については詳しく触れない。このページに興味を持ってくれたあなたは、すでに多少は知っているだろうから、インターネット上の創作童話「博士が100人いるむら」¹⁾を読んで、「無職」とされた16人、あるいは「死亡・不明」とされた8人の中に自分が入ってしまうのだろうか、いやだそんなの！と思った人も少なくないと思う。

確かに現実には厳しい。ただ、誰かを恨んで愚痴を言っても始まらない。現状打破のための政策を作ろうとか、企業と大学が連携を強めようとか、改善に向けたいろんな動きが始まった中で、あなたが今やるべきことを提案したい。

とはいえ、私は当事者ではない。この世界を外から眺めているやじ馬の一人である。お説教をするほど偉くないから、居酒屋で隣り合わせたおばさんの独り言と思ってくれてもいい。

研究者の資質

さて、研究者の資質として「運・鈍・根」という言葉をあなたは聞いたことがあるだろうか。ご存じない人のために、ごく簡単に説明しよう。

運＝指導者やテーマ、発見に恵まれる幸運。

鈍＝研究の先行きに「鈍感」(楽観的)でいられること。

根＝ねばり強く取り組むこと。根気。

これまで歴史に名を刻んだ研究者は例外なく、これらの資質を兼ね備えているのだそう。運・鈍・根は「成功する研究人生」のキーワードと言えるわけだが、研究にかかわらず、私たちが生きるうえで学ぶことが多いと思う。

「好き」の強み

あなたは運がいい。

「何だって？ こんな博士不遇の時代にぶち当たって、幸運なもんか」と反発したくなるかもしれない。

でも、今あなたが取り組んでいるテーマや分野は、あなたが一生をかけて打ち込む価値がある。それにあなたは巡り合えた。運がいいというのはそういう意味だ。

大学や大学院で理系に進む人たちに共通する特徴は、進路を「この学科(分野)が好きだから」選んでいるということだ。私たちが取り組んでいる連載「理系白書」の調査として2005年、高校生・大学生2100人を対象に実施したアンケートでは、文系の人たちより理系の人たちに、この特徴が目立った。

文系の人には「理科(数学)が嫌い(苦手)」という理由で文系を選ぶ傾向が強い。つまり消去法を選択である。これに対して理系の人には「理科(数学)が好き(得意)」という理由で進路を選んでいた²⁾。

この違いは大きい。自分が好きだから選んだのだ、と胸を張れるものに、あなたはすでに出会っている。

好きであることに理屈はいらない。「好きこそものの上手なれ」ということわざがあるけれど、好きだから寝食を忘れて打ち込める。長い一生を、好きなことのために費やせる人と、そうでない人がいたら、前者の方が成果も上げるし、満足度も高いだろう。

多くの学生が、打ち込める何かを見いだせないまま大学生活を過ごし、なんとなく就職先を見つけて社会人になる。それと自分の境遇を比べてみてほしい。「この分野はおもしろそうだ」とか「もっと知りたい」とか「将来性がある」とか、自分なりの理由で主体的に進路を選んだあなたがラッキーだということが分かってもらえるかもしれない。

耳年増になるな

あなたにはこれからしばらくの間、鈍感でいてほしい。

この情報化時代、鈍感でいることは難しい。身の回りにはおびただしい情報があふれている。しかも簡単に手に入る。

この恩恵は計り知れない。だが逆の作用も併せ持つ。主種雑多な情報があなたを迷わせるのだ。自分が選んだこの大学、この研究室、思い描く将来が「最良の選択」ではないのではないのか？ まして、博士をめぐる現状については、うわさがもっともらしく脚色されたり、極端な例が一般化されたりしている。余計にあなたを不安にさせるだろう。

たとえば博士の3割は定職につけないと言われる。だったら博士課程に進むのは損だと言うことになる。あなたの親も心配するだろう。ただし、あなたがその3割に入ると決まったわけではない。

失敗を避けるために情報を集めることは必要だが、それが高じて失敗の不安から前に進むことをやめてしまうことが往々にしてある。それは、おぼれる危険があるからと、水着姿で海を眺めているようなものだ。

もともと気の進まないことならまだしも、あなたはこの分野を「好きで」選んだのだ。そのチャンスを、くだらない不安でフイにしないでほしい。そのためにも、一時期はあえて情報に対して耳をふさいでいてほしい。

好きなことなら、やらずに後悔するより、やって後悔しよう。あなたが尊敬する科学者の先輩たちが若かった時代、進路に関する情報も、指導者に関する情報も、ごくごく限られていた。「迷いがなかった」というより、迷えるほどの情報がなかったというのが現実だろう。でも、それはそれで幸せだったし、じっさい、うまく働いた。

最近、ポスドクで留学することをためらう人が増えていると聞く。留学すると、帰国後の就職がいつそう厳しくなるからだという。これこそ、限らない可能性を秘めた挑戦を根拠のない不安であきらめてしまう典型例だ。

粘ってみよう

いまどき「石の上にも3年」なんて死語に近い。時代は猛スピードで進んでいる。

でも、3年間座ってみて分かることもある。やる前は大変な作業のように思うが、やってみれば意外と短い。たとえば20代の3年間をそれに投資してみる価値はある。やってみて「やっぱりだめだ」と思っても、20代ならやり直せるからだ。しかもその経験は必ず役に立つ。結果が出ないからといってすぐに投げ出してしまうのが一番もったいない。

ノーベル賞級の研究成果は例外なく、失敗の山の上に築かれたものだ。変な話だが、一流の研究者は失敗を喜ぶ。なぜなら、失敗が新たな成果を生む場合がある。あるいはなぜ失敗したかを考え続けるうちに、誰もが常識だと思っていたことの裏側に、新たな「常識」(新事実)を見つけたりするからだ。

生物工学という分野は、物理学や化学に比べれば新しい分野といえる。未解明のテーマがうなるほどある。存在すら知られていない原石が、掘り出されるのを待っている。あなたは、世界の誰も見つけていない何かを見つけるチャンスを与えられているわけだ。

地図もない、乗り物もない、徒手空拳の状態で未踏の場所へ達しようという挑戦は、考えただけでも途方もない。誰も成功を約束してくれないし、失敗するかもしれない。やりがいはあるが、時間と手間がかかることは覚

悟しなければならない。だからしつこく、粘り強く取り組んでほしい。うまく行けば、それはあなた自身の人生においてとても大きな意味を持つ。同時にそれは、人類全体にとっても大きな貢献になる。これが研究者という職業のだいご味だ。

感性は可能性を広げる

研究を志すあなたに、私は「運・鈍・根」に加えて「感」も提案したい。平たくいえば、社会が発するメッセージを感じ取る感性のことだ³⁾。

私はいま英国で暮らしている。この国は、ニュートンやファラデーなど著名な科学者を輩出した輝かしい歴史を誇る一方で、科学の不確実性が国民を欺き、科学不信を招くという苦い経験もした。最大のものはBSE(牛海綿状脳症)で多数の死者を出したこと。近年は遺伝子組換え(GM)食品に対する国民の不信が根強い。その嫌悪感は「フランケンシュタイン・フード」という呼び名にはっきりと表れている。

多くの人はGMを感情的に受け入れようとしない。「組み替え=自然ではない」という先入観からだ。その反動がオーガニックブームだ。定義のはっきりしないオーガニック食品に大枚をはたくという構造になっている。

専門知識を持っているあなたにとっては馬鹿馬鹿しい騒ぎと映るだろう。けれどあなたの将来の研究を支えるのも、こうした人たちなのである。大学の研究者ならそれは税金だし、企業の研究者なら成果を商品として売った収益という形で、社会とのかかわりから逃れることはできない。

ここで私が提案する「感=感性」は、生物工学という最先端の分野だからこそ求められる、社会に対する感受性である。自分が正しいことをやっているという確信があっても、それが社会に受け入れられなければ不十分なのだと思うしてほしい。

あなたが研究者になったなら、自ら根気強く、社会に語りかけてほしい。研究者に代わって、最先端の技術の恩恵とリスクとを等身大に伝える職業につくのもいい。とりわけこの分野では「伝える」人材が不足している。この仕事も、一朝一夕では上達しない責任の重い仕事だ。

どんなキャリアを選ぶことになっても、最後に問われるのは自分自身である。自分を強く磨く努力を惜しまないことが、今のあなたたちに求めたい唯一最大のことで。

- 1) <http://www.geocities.jp/dondokodon41412002/>
- 2) 毎日新聞科学環境部:「理系」という生き方, p.56, 講談社文庫(2007)。
- 3) 酒井邦嘉: 科学者という仕事, 中公新書(2006)。
酒井氏はこの中で、研究者の資質として「運・鈍・根」に加えて「勘」を提案している。